

## 【学会報告】

## 「ベトナムの障がい児・者の現状と日本の低出生体重児のケア体制」

板東あけみ<sup>1)</sup>、関谷滋<sup>1)</sup>、内藤誠二<sup>2)</sup>、西村陽子<sup>3)</sup>、仁木仁美<sup>4)</sup>

1)ベトナムの子ども達を支援する会、2) びわこ学園医療福祉センター草津、

3) こども発達支援リ・ハビリはつね、4) 京都市立修学院小学校

## 要 旨

1990年3月のベトナム一人旅から始まった「ベトナムの子ども達を支援する会」の活動も今年で34年目となる。新型コロナで3年間のブランクがあったので、今年3月に現地事情を確認のために事務局で先遣隊をだして現地行政機関と協議の上、今年から第9次事業として3年間の事業を行うこととなり、この夏活動を再開する。当会は現地関係機関と協働で障がいの予防・早期発見・早期介入を、医療と教育と福祉と地域という視点で実施している。この夏の活動では、6つの研修コースがある。医療の分野では、①省立病院でのリハビリ技術研修、②口蓋口蓋裂術後の発語などについての講習会、③低出生体重児用の母子健康手帳のサブブック作成開始。教育では④一般小学校の中に試行で作られた1校の支援学級の検証と今年度から3校に増える支援学級の在り方についての省内全郡代表教員の研修会と⑤新版K式発達検査の3回目の講習会に加えて新しく設置が計画されている相談センターの構想の話し合い。地域では⑥障がいの重い在宅の子ども達へのケアシステムの構築と地域保健管理員用の情報ハンドブックの改訂である。

このような研修内容をみていると、過去に行ってきた母子健康手帳導入や、リハビリ技術講習、障がい児学校の建設と教員研修、障がいのある幼児への早期支援センター開設、幼稚園教員向けの講習などが、点から線へとつながってきていることが読み取れる。

今ベンチェ省では25週の800グラム前後の低出生体重のお子様の退院実績がでてきている。日本の生存限界は22週で300グラム代の低出生体重児も救命できるようになったが家族、特に母親の強い自責の念や不安や孤独の解決が大きな課題となり、2024年2月現在40都道府県で総称リトルベビーハンドブックが作成されている。当会はベトナム保健省と連絡を取りながら、ベトナム版の特別なハンドブックのパイロットの作成を開始する。二国間の経験共有をしながら、それぞれの国の発展に寄与していきたい。